大阪高松大司教区典礼研修会

準秘跡と信心業：祝福、奉献、祓魔式、葬儀、ロザリオなど

主催：大阪高松教区典礼委員会
講師：パウロ酒井俊弘補佐司教
2024 年 10 月 27 日（日）午後 2 時～4 時
サクラファミリア（大阪梅田教会）聖堂にて

始めに：カトリック教会のカテキズムにおける準秘跡

準秘跡は教会によって制定されたもので、それは教会のさまざまな奉仕職、人々の多様な生活身分、キリスト者の生活のきわめて多岐におよぶ状況、および人間に役立つ事物の使用を聖化するためのものです。…準秘跡はつねに祈りを含み、しばしば、按手、十字架のしるし、聖水の注ぎ(洗礼の想起)などの一定のしるしを伴います。(『カトリック教会のカテキズム』1668 番)

準秘跡が誕生した要因は、洗礼に基づく信者の共通祭司職にあります。すなわち、すべての受洗者は自分自身が祝福となり、他の人々を祝福するように召されています。したがって、信徒も若干の祝福を行うことができます。(同 1669 番)

1. 祝福

準秘跡の中には、まず祝福(人、食事、物、場所の)があります。すべての祝福は神への賛美であり、そのたまものをいただくための祈りです。キリスト者はキリストにおいて、父である神から、「あらゆる霊的な祝福で」(エフェソ 1・3)祝福されています。そのため教会は、イエスのみ名を呼び求め、通常はキリストの十字架の聖なるしるしをしながら祝福を与えます。(同 1671 番)

儀式書『DE BENEDICTIONIBUS』(バチカン 1984 年) を参考にした『祝福の祈り』(カトリック札幌教区典礼委員会 1989 年)

司祭が司式する場合と信徒が司式する場合とを区別している。例：「父と子と聖霊の祝福 (+) が皆さんの上にありますように」と「父と子と聖霊の祝福が私たちの上にありますように」*ミサの聖体拝領の際に信徒の〈臨時の聖体奉仕者〉が祝福を頼まれた場合にも適用可。

(a) 祝福は誰がするのか

準秘跡の執行者は、必要な権限を付与された聖職者である。一定の準秘跡は、典礼書の規定に従い地区裁治権者の判断に基づいて、信徒の適格者もこれを授けることができる。(1) 聖別及び奉献を有効に行うことができるのは、司教の霊印を受けた者及び法律上又は適法な授与によってそれを認められた司祭である。(2) 祝福については、ローマ教皇又は司教に留保されているものを除いて、すべての司祭がこれを与えることができる。(3) 助祭は、法律上明白に認められている祝福のみを与えることができる。(『カトリック新教会法典』第 1168-1169 条)

(b) 祝福は誰に与えるのか

祝福は、主としてカトリック信者に与えられなければならない。ただし、洗礼志願者に

も、かつ教会の禁止による妨げがない限りカトリック信者でない者にも、これを与えることができる。（同第 1170 条）

(c) 信徒による通常の祝福

「主、願わくはわれらを祝し、また主の御恵みによりてわれらの食せんとするこの賜物を祝したまえ。われらの主キリストによりて願い奉る。アーメン。」

(d) 祝福の対象とその意味

「このご像を飾る（またはこのメダイを身につける）私たちを祝福してください。(+)」「このロザリオを使っておん子の神秘を黙想する人びとに豊かな祝福を注ぎ（+）おん子と一つに結んでください。」

(e) 聖水：新しいミサ典礼書に加えられた「水の祝福と灌水」

主日、とくに復活節の主日には、洗礼の恵みを思い起こすために、すべての教会堂と礼拝堂で、水の祝福と灌水を行うことができる。

ミサ中に行う場合は、初めの通常の回心の祈りの代わりに行われる。

聖水に塩を混ぜることが適当と思われるなら、司祭は任意で塩を祝福することができる。司祭は沈黙のうちに少量の塩を聖水に混ぜる。続いて、司祭は祝福された水に右手をひたし、自らに十字架のしるしをする。その後、灌水器を取り、奉仕者と会衆に灌水する。適当なら、教会堂内を回って灌水する。*列王記下 2 章参照

2. 奉献

ある種の祝福は永続的な効果を持ち、ある人々を神のために奉献し、物や場所を典礼的なことだけのために使用できるようにさせます。人に関するもの――叙階の秘跡のものとは異なる――の中には、修道院の男女院長の祝福、おとめとやもめの奉献、修道誓願式、教会のある種の奉仕者(朗読奉仕者、祭壇奉仕者、カテキスタなど)の祝福などがあります。物に関する祝福の例としては、教会堂や祭壇の奉献ないし祝福、聖油、祭器具や祭服、鐘などの祝福が挙げられます。（『カトリック教会のカテキズム』1672 番）

<u>奉献された教会堂の用途変更について</u>：聖なる場所は、その大部分が破損した場合，又は権限を有する裁治権者の決定によって、又は事実上、永続的に世俗的用途に変更された場合、奉献又は祝別の効果を失う。（『カトリック新教会法典』第 1212 条）

（1）教会堂が神の礼拝のために全く使用されず、かつこれを修理する可能性もない場合、教区司教は、その用途を不潔でない世俗的な用途に変更することができる。（2）他の重大な理由が教会堂を神の礼拝のためにこれ以上使用しないよう要請する場合、教区司教は司祭評議会に諮り、かつ、その教会堂において適法に権利を有する人びとの同意を得て、人びとの霊的善益にとっていかなる害もない限り、その教会堂を不潔でない世俗的用途に変更することができる。（同第 1222 条）

3. 祓魔式（ふつましき）

教会がイエス・キリストのみ名により、公に権威をもって、人あるいは物が悪魔の支配から保護され、その支配力から引き離されることを求める式は、祓魔式と呼ばれます。

イエスはそれを実行なさいました。教会は、イエスから祓魔の権能と務めを受けています。簡単な形では洗礼式のときに行われます。「大祓魔」と呼ばれる盛儀祓魔式は、司教の許可を得た司祭だけが行います。それは、教会が定めた規則を厳守して、慎重に行われなければなりません。祓魔式の狙いは悪魔を追放し、悪魔の支配から解放することにありますが、これはイエスがご自分の教会にゆだねられた霊的権能によるものです。病気、とくに精神的病気の場合は祓魔式を行わず、医学的治療にゆだねます。したがって、祓魔を行う前に、当人の苦しみの原因が病気ではなく、悪魔の働きであることを確かめる必要があります。(『カトリック教会のカテキズム』1673 番)

(1) なんぴとも、地区裁治権者から特別に明白な許可を得ない限り、悪魔につかれた者に対して適法うに祓魔式を行うことはできない。(2) 前項の許可は、地区裁治権者によって、信心、学識、賢明及び品行方正な生活において秀れた司祭にのみ与えられなければならない。(『カトリック新教会法典』第 1172 条)

“盛儀ではない”祓魔式：四旬節の主日の典礼における「解放を求める祈り」。

4. 葬儀

キリスト教葬儀は、教会の典礼祭儀です。そこで教会の奉仕職が目指すのは、故人との生きた交わりを表すと同時に、参列者を葬儀に集まった共同体の仲間に加え、彼らに永遠のいのちを告げ知らせるということです。(『カトリック教会のカテキズム』1684 番)

葬儀の際のことばの典礼のためには、参列者の中には教会にあまり来ない信者や、故人の友人でキリスト者でない人々がいるだけに、とくに入念な準備が必要です。説教は、雄弁な弔辞の形式を避け、復活されたキリストの光によってキリスト教的死の神秘を明らかにすべきです。(同 1688 番)

(a) 葬儀を司祭以外が司式（司会）する場合

ミサを除いて助祭または信徒も司式することができる。…なお、信徒が司式する場合、説教のかわりに、あらかじめ教区が用意した文書を読み上げることができる。(『緒言』7) 信徒が司式する場合は、単なる礼服や背広ではなく、儀式のための奉仕者の祭服を着用する。

5. 信心業

キリスト者の宗教的感情は教会の秘跡生活を中心にしながら、多様な信心業となって表れました。たとえば、聖遺物の崇敬、聖所訪問、巡礼、行列、十字架の道行、宗教舞踊、ロザリオ、メダイなどです (『カトリック教会のカテキズム』1674 番)。これらの信心業は教会の典礼生活の延長ですが、これにとって代わるものではありません。(同 1675 番) 民間信仰を維持し支援するには、司牧的識別が必要です。必要があれば、信心業のもととなっている宗教的感情を浄化し、矯正し、キリストの神秘についての知識を深めるようはからなければなりません。(同 1676 番)

(a) ロザリオ

みことばが今、人からとらえられること、目で見られること、思いで把握されることを望んでおられたのです。どのような方法で、とあなたは尋ねるかもしれません。その方法は、まさに飼い葉桶に寝かされている姿、処女である母に抱かれる姿、山上で説教し、

祈りで夜を明かしておられる姿、十字架にかかり、亡くなられた姿、死者の中にあっても自由にふるまわれ（詩編 88・6　ヴルガタ参照）、死者の国を支配する姿、さらに三日目に復活し、勝利のしるしとして釘の跡を使徒たちに示される姿、そして最後に彼らの目の前で、天に昇って行かれる姿です。これらすべての出来事の中で、わたしたちに真実の思い、信心深く、聖なる思いを起こさせないものが一つでもあるでしょうか。わたしはこれらの出来事を一つずつ思いめぐらすときに、神のことを考えているのです。（教会の祈り・朗読 10 月 7 日聖ベルナルド）

Q　アヴェ・マリアの祈りとは？

A　マリアさまにとってこの祈りは聞き捨てならない祈りです。大天使ガブリエルから言われた「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」（ルカ 1：28）と、エリザベトから言われた「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています」（同 42）で始まる祈りですが、これらの言葉ほどマリアさまにとって嬉しいものはありません。世界のどこからでもこの言葉が聞こえてくれば、にこっと笑って「あら、誰が言ってくれてるのかしら…」と注目してくださるに違いありません。すると、「罪深いわたしたち」と言っているではありませんか。「わたしが来たのは、罪人を招くためである」（マタイ 9：13）と言われたイエスさまと同じ心を持つマリアさまにとって、罪人の願いを無視することはできません。この祈りを祈ってくれる人の今、そして死を迎えるときに、必ずともにいてくださるでしょう。

(b) 守護の天使

人間は生まれてから死ぬときまで、天使たちの保護と執り成しを受けています。おのおのの信者はいわばそれぞれの保護者や牧者のような天使に付き添われ、いのちに導かれます。（『カトリック教会のカテキズム』336 番）

(c) 巡礼

典礼暦の悔い改めの時と日(四旬節、イエスの死を記念する各金曜日)は、教会が悔い改めを行うのに最適の時期です。黙想会、回心式、悔い改めのしるしとしての巡礼、断食、施しのような犠牲、助け合い(慈善や宣教事業)などを行うのにとくにふさわしい時です。（同 1438 番）

巡礼は、天国へ向かうわたしたちの地上での歩みを力づけてくれます。伝統的に、それは祈りを新たにするための最適なときとなっています。巡礼地の聖堂は、生ける水を求める巡礼者がさまざまなキリスト教的な祈りを教会として実践するための、すばらしい場所です。（同 2691 番）

巡礼に出かける意味：このように希望と忍耐が影響し合うことから、次のことが明らかになります。つまり、キリスト者の人生は、目的地である主キリストとの出会いを垣間見せてくれるかけがえのない伴侶、すなわち希望を養い強める絶好の機会をも必要とする旅路だということです。…巡礼が、聖年のすべての行事の基本要素であることは偶然ではありません。旅に出ることは、人生の意味を探し求める人の特徴です。徒歩巡礼は、沈黙、苦労、いちばん大切な物事、それらの価値の再発見に大いに有益です。来年も希望の巡礼者たちは、聖年の体験を充実させるため、古くからの道や現代の道を歩んで行くはずです。（大勅書『希望は欺かない』5 番）